

## 働きを支えるのはだれか

(マルコ12・41〜44)

## 一、やもめの献金

41節をご覧ください。それから、イエスは献金箱の向かい側に座り、群衆がお金を献金箱へ投げ入れる様子を見ておられた。多くの金持ちがたくさん投げ入れていた。とあります。一方、ひとりの貧しいやもめがやってまいりました。42節です。そこに一人の貧しいやもめが来て、レプタ銅貨二枚を投げ入れた。それは「コドラントに当たる。」とあります。やもめとは、夫に先立たれた女性のことです。当時たいへん貧しい生活を強いられました。やもめが、実際に献金したのは「ペルター」という硬貨でした。それがマルコの福音書では「レプタ」というギリシア語に翻訳され、その後「レプタ」を理解しない人々のために「コドラント」というローマの青銅貨で説明されています。というこ

とはマルコの福音書は、「ペルター」も「レプタ」もよく分らない、ローマ帝国の価値観が広く及んでいた時代の人たちに語られた、ということがわかります。ちなみに、当時ローマの銭湯の入浴料が「コドラントであったそうです。

それはともかく、**レプタ銅貨二枚**は、彼女が持っているすべてでした。主

は、やもめがささげた献金について喜ばれ、評価されました。43節、44節です。イエスは弟子たちを呼んで言われた。「まことに、あなたがたに言います。この貧しいやもめは、献金箱に投げ入れている人々の中で、だれよりも多くを投げ入れました。皆はあり余る中から投げ入れたのに、この人は乏しい中から、持っているすべてを、生きる手立てのすべてを投げ入れたのですから。」と。

私共はここから何を教えられるのでしょうか。そのことを、想像をふくらませて受け止めてまいります。

## 二、主は何を喜ばれたのか

献げものについて、皆さまはどのよう

に受け止めておられるでしょうか。主イエスは、やもめが献げた献金の何を喜ばれたのでしょうか。彼女の犠牲的な行いを喜ばれたのでしょうか。もちろん、主が私たちの犠牲をよしとされることもあります。ですが、この箇所はそうでないようです。主が喜ばれる献げものは、喜んで献げることです。献げる人は心の中で「もっと献げたい」と思っています。そこでやもめは、生活費のすべてであったレプタ銅貨二枚を献げましたが、たとえば一枚献げて、残り一枚で食べるものを買って家に帰り、主に感謝の祈りを献げていただいたとしても、主は喜ばれたと思います。

## 三、献げものは自発的なもの

私たちにあって、献げものは自発的なものです。ですから、献げないからといって神からさばかれるとか、そういう性質のものではありません。教会によっては「収入の十分の一を献げないクリスチャンは神さまのものを盗んでいます」と教える指導者もいるようです。たしかに旧約聖書には、そのように書かれています。マラキ書3章8節です。ですが、それは律法であって、そうでなければならぬとして書かれたものです。旧約の人々にとっては律法を守らないのはルール違反、約束違反でした。今日に当ってはめるなら、脱税をするようなものです。脱税をしたら、それが発覚した時に償わなければなりません。たとえ発覚しなかったとしても、犯罪です。

では、私たちは献げものについて、どのように受け止めたらいのでしょうか。私は次のように考えます。きょうの聖書箇所であるなら、やもめがレプタ銅貨二枚を献げようが、一枚を献げて残りの一枚で食料を買って感謝して食事をしたところが、神への満ち溢れる感謝と共に献げるのを、主は喜ばれると受け止める者です。

先ほどもお語りしましたが、献げる人は「もっと献げたい。むだを省いて、もっと献げられないものか」と思って

いるものです。それは、神殿における献金だけでなく、人に対しても同じです。「もっと助けられないものか」と考えられています。ですから、常に「献げたい」という気持ちがあるわけですね。

これこそは、律法を守ることに熱心なパリサイ人にできなかったことです。主イエスはおっしゃいました。ご自身の教えを聞くことと近づいて来た群衆と弟子たちに語られました。マタイの福音書5章20節です。へわたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れませんか。と。すごいことばです。こんなことばを聞いたら、「だれが救われるのか」と思ってしまうことではありません。ですが主イエスを信じる者は、だれから説明されるのでもなく、意味が分かるのです。なぜでしょうか。それは、聖霊の圧倒的な迫りを知っているからです。主イエスを信じて、聖霊の働きを知り、聖霊の迫りを知りますと、「主にお従いしたい」「主にお献げしたい」として押し出されてしまうからです。

献げものは「ねばならない」ではなく、あくまでも自発的なものです。

こうして、私たちの献げものが教会の宣教活動を支え、また教団の宣教活動を支えます。私共にとって、それは喜びです。